

## 《原著》

## 保育科に在籍する大学生と保育士・幼稚園教諭の 児童虐待に対する意識の比較

堀内ゆかり<sup>1</sup>・柴野 有紀<sup>2</sup>・堀内 雅弘<sup>2</sup>

### Comparison of recognition to child abuse between college students and children's nurse and kindergarten teachers

Yukari HORIUCHI<sup>1</sup>, Yuuki SHIBANO<sup>2</sup>, Masahiro HORIUCHI<sup>2</sup>

**Abstract** : The purpose of the present study was to compare the recognition to child abuse between 146 college students and 153 children's nurses and kindergarten teachers. The survey consisted of 39 case examples and each case example had three questions, respectively. In regard to the question whether it is abuse or neglect, students tended to answer "it is abuse or neglect" whereas nurses and teachers tended to answer "I have no idea" or "It does not a huge issue". In regard to the question whether it should be noticed to the related institutions or not, students tended to answer "it should be noticed" whereas nurses and teachers tended to answer "I have no idea" or "It is not needed". In regard to the question about supports at institutions, students tended to answer "continuous support" whereas nurses and teachers tended to answer "observation". From these results, college students responded highly sensitive to child abuse compared to children's nurses and kindergarten teachers.

**Key words** : physical abuse (身体的虐待), sexual abuse (性的虐待), neglect (ネグレクト), emotional maltreatment (心理的に不適切なかかわり), child abuse (児童虐待)

#### 問題と目的

近年、虐待という言葉は報道等で取り上げられることが多くなり、社会的な関心が高まった。その結果、通報や相談件数が増加している。厚生労働省の2009年7月の報道発表資料によると、2008年度の児童虐待対応件数は42,000件以上にのぼり、統計調査が始まった1990年度と比較すると、

実に約40倍にも増加している(厚生労働省,2009)。

児童虐待が起こるには、様々な原因があると思われる。地域におけるネットワークの確立が不十分であり(反町ら,2004)、地域とのコミュニケーション不足により、虐待に気づいたりできる人も、虐待が起こる前に相談にのってあげられる人も減っている可能性を考えると、現代の日本社会ではさらに家庭が孤立化したり、親が育児不安などをさらに抱え込み、児童虐待を生みだしやすい環境になっているかもしれない(八重樫,2003)。

表面化しやすい身体的虐待に加え、子どもの正常な発育・発達を損なう不適切な養育・監護の怠慢・養育の拒否といった育児放棄をしてしまうネグレクトも大きな社会問題となってきている。一

<sup>1</sup> 北海道医療大学心理科学部

<sup>2</sup> 北翔大学人間福祉学部

<sup>1</sup> School of Psychological Science, Health Sciences University of Hokkaido

<sup>2</sup> Department of Human Care Studies, Hokusho University

般に、児童虐待は家庭内という閉鎖的な環境で起こっているため、第三者が気づくような地域環境が整っていないことが多く、このため虐待の実態が明らかにされにくい状況であると思われる。児童虐待の予防や早期発見のためには、子どもやその家族から出されている様々なサインを、身近にいる人たちが見過ごさないように心がけることが大切である。乳幼児の多くは、保育園や幼稚園で長時間過ごすことが多く、保育者が児童虐待に対する意識や認識を深めることが重要であると考えられる。実際、児童虐待についての基礎知識の必要性もこれまで報告されてきている（反町ら、2004）。また、保育者とこれから保育者を目指す者とは、児童虐待に対する意識の違いがあるものと考えられ、今後保育者を目指す人たちが、児童虐待について意識や認識を深めることも重要である。しかしながら、これまで行われてきた児童虐待意識に関する研究（益田ら、2003、佐藤ら、2003、八重樫、2003、2005）では、この点はほとんど明らかにされていない。

そこで本研究では、保育士・幼稚園教諭の児童虐待に対する意識と、それらを目指している大学生の児童虐待に対する意識の違いを比較検討することを目的とした。

## 方法

**対象者** 対象は、保育学科に在籍している大学生146名と働いている保育士・幼稚園教諭153名の合計299名であった。大学生は、1年生のみを対象とし、保育所や幼稚園などでの実習経験は全員なかった。

大学生に対しては直接アンケート用紙を配付し、自記式調査を実施し、その場で回収した。保育士・幼稚園教諭にはアンケート用紙を職場に郵送し、後日返送してもらった。回収率は大学生97.3%、保育士・幼稚園教諭69.3%であり、有効回答率は、大学生80.1%、保育士・幼稚園教諭61.4%であった。アンケートに対する回答はあくまでも任意であること、回答は平均値で処理する

ため個人情報には守られること、研究以外の目的には使用しないことを文書配布の上説明し、理解および同意を得た上で調査は実施された。

**調査内容** 児童虐待意識には、ビネット調査（高橋ら、1995、1996、表1）を用いることにした。ビネット調査とは、短い事例文に対し5件法で回答を、回答者の考え方や意識を把握分析する調査方法である。調査項目は、4種類に区分されており、身体的虐待意識8項目、性的虐待意識8項目、ネグレクト意識13項目、心理的虐待意識10項目の合計39項目であった。各項目につきA：「虐待や放任だと思うか」、B：「児童福祉の現業機関に連絡や通告をする必要があるか」、C：「児童相談所ではどのように対応すると思うか」という3つの質問がある。これらに対する回答は、Aでは「1. まったく問題ない」から「5. 虐待または放任である」、Bでは「1. 明らかに必要ない」から「5. 明らかに必要ある」、Cでは「1. 対応の必要はない」から「5. 親子を分離する」までの各々5段階である。すなわち、合計で117問の設問に回答してもらった。

## 結果

**設問A** 表2に $\chi^2$ 検定の結果、大学生と保育士・幼稚園教諭の設問Aに対する回答で人数の偏りが有意であった項目の回答人数とその割合を示す。その結果、事例文9では( $\chi^2(4)=30.173$ ,  $p<.05$ )、事例文16では( $\chi^2(4)=11.183$ ,  $p<.05$ )、事例文31では( $\chi^2(4)=13.082$ ,  $p<.05$ )、事例文34では( $\chi^2(4)=13.715$ ,  $p<.05$ )、および事例文39では( $\chi^2(4)=84.189$ ,  $p<.05$ )であった。残差分析を行った結果、事例文9については、大学生は「あまり問題がない」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「放任だと思う」と回答した人が多かった。さらに事例文16および31については、大学生は「放任または虐待だと思う」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「わからない」と回答した人が多かった。事例文34については、大





学生は「あまり問題でない」、または「虐待や放任ではないが不適切である」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「虐待や放任の疑いがある」と回答した人が多かった。事例文39については、大学生は「虐待の疑いがある」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「あまり問題でない」と回答した人が多かった。

**設問B** 表3に $\chi^2$ 検定の結果、大学生と保育士・幼稚園教諭の設問Bに対する回答で人数の偏りが有意であった項目の回答人数とその割合を示す。その結果、事例文8では( $\chi^2(4)=9.917$ ,  $p<.05$ )、事例文11では( $\chi^2(4)=32.916$ ,  $p<.05$ )、事例文12では( $\chi^2(4)=12.449$ ,  $p<.05$ )、事例文16では( $\chi^2(4)=14.137$ ,  $p<.05$ )、事例文26では( $\chi^2(4)=9.495$ ,  $p<.05$ )、事例文31では( $\chi^2(4)=10.128$ ,  $p<.05$ )、事例文35では( $\chi^2(4)=17.302$ ,  $p<.05$ )、および事例文38では( $\chi^2(4)=17.724$ ,  $p<.05$ )であった。残差分析を行った結果、事例文8および11については、大学生は「多分必要ある」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「どちらとも言えない」という人が多かった。事例文12については、大学生は「明らかに必要である」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「どちらとも言えない」という人が多かった。事例文16については、大学生は「多分必要である」という人が多かった。事例文26および35については、大学生は「多分必要である」、または「明らかに必要である」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「多分必要でない」と回答した人が多かった。事例文31については、保育士・幼稚園教諭の「どちらともいえない」という人が多かった。事例文38については、大学生は「明らかに必要である」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「どちらとも言えない」と回答した人が多かった。

**設問C** 表4に $\chi^2$ 検定の結果、大学生と保育士・幼稚園教諭の設問Cに対する回答で人数の偏りが有意であった項目の回答人数とその割合を示す。その結果、事例文8では( $\chi^2(4)=13.715$ ,

$p<.05$ )、事例文12では( $\chi^2(4)=12.449$ ,  $p<.05$ )、事例文13では( $\chi^2(4)=11.183$ ,  $p<.05$ )、事例文16では( $\chi^2(4)=11.183$ ,  $p<.05$ )、事例文23では( $\chi^2(4)=12.449$ ,  $p<.05$ )、事例文27では( $\chi^2(4)=17.302$ ,  $p<.05$ )、であった。残差分析を行った結果、事例文8については、大学生は「親または子どもに1~2回面接をする」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「しばらく様子を見守る必要がある」と回答した人が多かった。事例文12については、保育士・幼稚園教諭は「対応の必要がない」と回答した人が多かった。事例文13については、保育士・幼稚園教諭は「しばらく様子を見守る」と回答した人が多かった。事例文16については、大学生は「在宅で継続的に援助していく必要がある」と回答した人が多かった。事例文23については、大学生は「親子を分離する」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「しばらく様子を見守る」と回答した人が多かった。事例文27については、大学生は「在宅で継続的に援助する」、または「親子を分離する」と回答した人が多く、保育士・幼稚園教諭は「対応の必要がない」と回答した人が多かった。

## 考察

本研究では、保育士・幼稚園教諭とそれらを目指している大学生の「児童虐待に対する意識」を比較検討した。その結果、大学生の方が保育士・幼稚園教諭と比較して、事例文に対して、虐待と認識する傾向にあった。

大学生と保育士・幼稚園教諭との間で有意な差が認められた項目を4種類の虐待に区分すると、設問Aではネグレクトに関する2項目および性的虐待に関する3項目の計5項目で差が認められた。設問Bでは、身体的虐待に関する2項目、ネグレクトに関する2項目、性的虐待に関する1項目、心理的に不適切な関わりに関する3項目の計8項目で差が認められた。設問Cでは、ネグレクトに関する1項目、性的虐待に関する2項目および心理的に不適切な関わりに関する3項目の計6

表3 設問Bにおける大学生と保育士・幼稚園教諭の観測値(割合)

	① 観測値(割合%)	② 観測値(割合%)	③ 観測値(割合%)	④ 観測値(割合%)	⑤ 観測値(割合%)	合計 観測値(割合%)
B8 他のきょうだいと比べて「お前はだめだ」という						
大学生	6(5.1)	9(7.7)	50(42.7)*	39(33.3)*	13(11.1)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	3(3.2)	12(12.8)	57(60.6)	18(19.1)	4(4.3)	94(100)
B11 親が子どもを叩いたが、けがやあざは生じなかった						
大学生	3(2.6)	9(7.7)	32(27.4)*	42(35.9)*	31(26.5)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	3(3.2)	13(16.0)	53(56.4)	18(19.1)	3(3.3)	94(100)
B12 子どもが嫌がるのに、年齢不相応な早期教育を強要する						
大学生	3(2.6)	15(12.8)	40(34.2)*	37(31.6)	22(18.8)*	117(100)
保育士・幼稚園教諭	3(3.2)	20(21.3)	45(47.9)	19(20.2)	7(7.4)	94(100)
B16 親が自分の好みで顔に露出度の高い服を着させる						
大学生	6(5.1)	19(16.2)	51(43.6)	32(27.4)*	9(7.7)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	9(9.6)	20(21.3)	53(56.4)	9(9.6)	3(3.2)	94(100)
B26 子どもの高熱を産薬によって下げて、翌朝、保育園に連れて行く						
大学生	9(7.7)	13(11.1)*	58(49.6)	27(23.1)*	10(8.5)*	117(100)
保育士・幼稚園教諭	10(10.6)	26(27.7)	50(53.2)	6(6.4)	2(2.1)	94(100)
B31 家出した子どもが帰ってきてても、家に入れない						
大学生	1(0.9)	7(6.0)	31(26.5)*	45(38.5)	33(28.2)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	1(1.1)	3(3.2)	42(44.7)	27(28.7)	21(22.3)	94(100)
B35 罰として、子どもの大事にしていたおもちゃを捨てる						
大学生	7(6.0)	9(7.7)*	42(35.9)	28(23.9)*	11(9.4)*	117(100)
保育士・幼稚園教諭	7(7.4)	21(22.3)	54(57.4)	10(10.6)	2(2.1)	94(100)
B38 親が子どもを叩いたら、あざができた						
大学生	1(0.9)	0(0.0)	8(6.8)*	30(25.6)	78(66.7)*	117(100)
保育士・幼稚園教諭	0(0.0)	0(0.0)	23(24.5)	30(31.9)	41(43.6)	94(100)

\*: p<.05 大学生 vs. 保育士・幼稚園教諭の人数の偏り  
 ①明らかに必要ない ②多分必要ない ③どちらとも言えない ④多分必要ある ⑤明らかに必要ある

表4 設問Cにおける大学生と保育士・幼稚園教諭の観測値(割合)

	① 観測値(割合%)	② 観測値(割合%)	③ 観測値(割合%)	④ 観測値(割合%)	⑤ 観測値(割合%)	合計 観測値(割合%)
C8 他のきょうだいと比べて「お前はだめだ」という						
大学生	6(5.1)	31(26.5)*	52(44.4)*	24(20.5)	4(3.4)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	11(11.7)	42(44.7)	29(30.9)	11(11.7)	1(1.1)	94(100)
C12 子どもが嫌がるのに、年齢不相応な早期教育を強要する						
大学生	5(4.3)*	35(29.9)	50(42.7)	18(15.4)	9(7.7)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	12(12.8)	39(41.5)	33(35.1)	7(7.4)	3(3.2)	94(100)
C13 親が洗濯をしないで、子どもはいつも不衛生な服を着ている						
大学生	0(0.0)	10(8.5)*	43(36.8)	51(43.6)	13(11.1)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	2(2.1)	19(20.2)	28(29.8)	41(43.6)	4(4.3)	94(100)
C16 親が自分の好みで顔に露出度の高い服を着せる						
大学生	14(12.0)	47(40.2)	36(30.8)	18(15.4)*	2(1.7)	117(100)
保育士・幼稚園教諭	19(20.2)	49(52.1)	20(21.3)	6(6.4)	0(0)	94(100)
C23 親が思春期の娘の胸を愛撫する						
大学生	1(0.9)	2(1.7)*	18(15.4)	22(18.8)	74(63.2)*	117(100)
保育士・幼稚園教諭	1(1.1)	11(11.7)	21(22.3)	18(19.1)	43(45.7)	94(100)
C27 子どものお話し掛けを一切無視して答えない						
大学生	0(0.0)*	15(12.8)	35(29.9)	53(45.8)*	14(12.0)*	117(100)
保育士・幼稚園教諭	6(6.4)	16(17.0)	40(42.6)	28(29.8)	4(4.3)	94(100)

\*: p<.05 大学生 vs. 保育士・幼稚園教諭の人数の偏り  
 ①対応の必要はない ②しばらく様子を見守る ③親または子に1:2回面接する ④在宅で継続的に援助する ⑤親子を分離する

項目で、それぞれ有意な差が認められた。

全体的な傾向として、身体的な虐待意識については、保育士・幼稚園教諭と大学生との間に、大きな意識の違いはなく、その他の3つのカテゴ

リーでは、両者の間に大きな意識の違いがあったといえる。佐藤らは(2003)高校生を対象にビネット調査を行っており、その結果、心理的に不適切な関わり、ネグレクト、性的虐待など普段マスコ

ミに出にくい項目に対する意識は低いことを示唆している。一般に、身体的虐待はマスコミなどで取り上げられることが多いと思われるため、このことが身体的虐待に対する両者の意識の違いが少なかったと考えられる。一方、その他の3項目は一般に表面化しにくいいため、得られる情報量も少ないと考えられる。このことが、大学生という立場と普段職業として子どもと関わっている保育士・幼稚園教諭の意識の差になって現れたのではないかと推測される。

次に、39個の各事例文それぞれについて各カテゴリー別に考察する。

身体的な虐待については、事例文11および38で差が認められた。この事例文は、「親が子ども叩いて（叩いたけど）、あざが生じなかった（事例文11）か、あざが生じたか（事例文38）」という、叩くという共通の行為の結果、あざが生じたか否かについての意識を問うものである。両事例文とも明らかに大学生のほうが敏感に反応しているといえる。これは、大学生はあざが生じたかどうかということよりも、「叩く」という行為そのものに対して過敏に反応しているのではないかと思われる。あざが生じたという事例文でも、「どちらともいえない」という保育士・幼稚園教諭の意識は、経験による差から生じたのかもしれない。実際、保育士は児童虐待について「身体の傷」を重要視していることから（石原ら、2004）、子どもの身体の傷が虐待による不自然な傷なのか偶発なのかを、ある程度判別できる経験があると思われる。この経験の差が、両者の意識の違いをもたらしたのかもしれない。

心理的に不適切な関わりでは、事例文8、12、27および35で差が認められた。

事例文8の「きょうだいとの比較」および事例文12の「いやがる子に早期教育」の両事例文に対して、大学生が関係機関への通告やそこでの対応に対して、敏感に反応していた。すなわち、大学生は「通告の必要も多分ある」であろうし、「少なくとも1-2回は面談する」であろうという敏感な意識に対し、保育士・幼稚園教諭は、「通告す

べきかどうかはわからない」し、「しばらく見守るか対応の必要もない」であろう、という意識であった。大学1年生では、おそらくその数ヶ月あるいは数年前から、高校卒業後どのような進路を目指すのか葛藤が多かった時期と思われる。この時期に将来の進路について親との相談やトラブル、強制される教育や兄弟姉妹間の比較もされてきた可能性があり、彼らの記憶にも新しく、そもそも人と比較されることそのものに抵抗や反発があるのかもしれない。一方、保育士・幼稚園教諭にしてみれば、しつけの一環として、同一家庭内での兄弟・姉妹比較や親が子どもの将来を思っただけの早期教育は、あくまでも家庭内の問題であるため、その背景も慎重に検討する必要があるのではないかと考えていたのかもしれない。

事例文27「話し掛けを無視する」および事例文35の「罰としておもちゃを捨てる」では、両者の意識の差はさらに拡大していた。佐藤ら（2003）は、高校生を対象にした調査で「自分がそういう対応をされたら傷つくのではないか」という気持ちが、ある行為に対して虐待であるという反応として現れる可能性がある」ことを報告している。すなわち、調査対象は異なるものの、大学生はこの事例文に対して、自分の立場に置き換えて回答していた可能性がある。一方、家庭内でこのような事態が起きることの背景は、単に不適切な関わりかどうかという問題だけでなく、しつけの一環と捉えられる可能性もある。このようなことが、保育士・幼稚園教諭の判断を難しくしていた要因かもしれない。

「ネグレクト」では、事例文9、13、26および31で差が認められた。事例文9の「飲酒に対して何もいわない」ことでは、設問から子どもの対象年齢を推測することは難しく、回答者により差異がみられると思われるが、大学生活において大学生が友人を家に呼び飲酒することは、身近にあることと思われる。その結果、大学生の飲酒に対する考えが寛容になったのではないかと考えられた。しかし、喫煙と大人の同伴しない飲酒は、シンナーなどの有機溶剤乱用と強い関連があるこ



と(和田ら2006)も報告されていることから、この事例文を軽視することは問題であるかもしれない。

事例文13「子どもが不衛生な服を着ている」ことも、虐待理由の一つとして挙げられているが、一方で確証を得るまでに時間もかかると思われる。このため、関係機関では、「しばらく見守る」という、保育士・幼稚園教諭の回答の多さにつながったのではないかと推測する。

事例文26「高熱を座薬で下げ、保育所につれて行く」ことでは、大学生はそもそも、無理やり熱を下げる行為そのものが虐待であると感じていた可能性がある。しかし、一般に保育所・幼稚園などでは熱が一定以上高いと、保護者に連絡するが、当日の朝、熱がなければ園で預かることも一般的であり、医師や看護師などが常駐している園もあることから、通告の必要性はないと考えたと思われる。

事例文31について、大学生は家から閉め出すということに強い抵抗を感じていた結果かもしれないが、保育士・幼稚園教諭は、家出の理由もケース・バイ・ケースである可能性も高く、またしつけという点からも、解釈が難しかったことが、両者の違いを生んだと考えられる。

「性的虐待」では、事例文16, 23, 34および39で差が認められた。

事例文16の「露出度の高い服を着せる」では、設問AからCの全てで両者の意識が分かれた事例文である。大学生は虐待であると認識し、そのため通告そして在宅援助の必要があるというように繋がっていったと考えられる。一方、保育士・幼稚園教諭は、本来この行為が虐待かわからないとした人が最も多かったため、設問BおよびCでも回答数が分散したのではないかと考えられる。この事例文は、そもそも「親の好みで～」という文章と「露出度の高い～」という文章のどちらにより強く影響を受けるかによって、回答が異なる可能性があると思われる。本研究では、この点について明らかにすることができないが、いずれにしても大学生は、自分の好みでないことをさせられ、

さらにそれが人の目を引くようなものであることに対して、非常に過敏に反応していた可能性が高い。

事例文23「親が胸を愛撫する」について、大学生は明らかに親子分離すべきと考えているのに対して、保育士・幼稚園教諭の回答は分離から見守りまで分散していた。しかしながら、保育士・幼稚園教諭の回答もそのほぼ半分が親子分離をすべきであるという回答の多さから、両者ともこの性的虐待については重く捉えているようである。一方、児童相談所が即座に親子分離を行使する(あるいはできる)とは考えにくく、なかなか表面化しにくい事例文でもあるから、まずは見守りをし、1-2回面談をする必要もあろうという保育士・幼稚園教諭の意識から、このような結果になったのではないかと推測する。

事例文34「親が異性体験について話す」および事例文39「ポルノビデオを見せる」は、両事例文とも、親から子どもに対する性教育あるいは性情報の伝播とも考えられる事例文であるが、両者の間に一貫した傾向はなかった。すなわち、異性体験については大学生があまり問題視していないことに対して、ビデオについては、大学生のほうが虐待であると強く認識していた。これは、どの程度の適切な情報を伝えるかということに対して、回答者の解釈の幅が広いとは思われた結果ではないかと推測する。すなわち、これらの事例文に対する回答は、保育士・幼稚園教諭対大学生という回答者の属性よりも、各個人に依存していた可能性がある。しかし、近年、性行動の低年齢化から、正しい性教育は重要だと思われ、実際に小学生を対象にした調査では、半数以上の小学生が相談相手に父母をあげているものの、相談を受けているという認識に立っている父母は30%にも満たなかったことから、両者の間に隔たりがあることも指摘されている(町田ら2006)。

これまで述べてきたように、現場の保育士・幼稚園教諭と彼らを目指す大学生との間には、児童虐待に関する意識で差が認められていた。保育者を対象にした調査では、虐待に関わる保育者の困

難として、発見や通告に関わる困難などが挙げられている(土屋ら2004)。すなわち、今回の調査対象となった保育士・幼稚園教諭も、各事例文が本当に虐待にあたるのかどうか、自らの経験から、慎重に考えた結果の回答ではないかと思われる。子どもに関わる施設や職員を対象にした調査でも、虐待は確証を得るのに時間がかかるため、地域におけるシステムやネットワークの確立を求める声や、虐待に関する基礎知識の必要性を求める声が多かったことが報告されている(反町ら2004)。本研究で認められた児童虐待に対する意識の差異が、保育士および幼稚園教諭の現場で勤務することで、彼らが保育者として変化・成長した結果として表れたものであるとすれば、今後保育者を目指す大学生が児童虐待に対する正しい知識を持ち、認識を深めることはますます必要であろう。

## 謝辞

本研究を遂行するにあたり、アンケート調査にご協力いただいた、大学生および保育士・幼稚園教諭の方々に深謝いたします。

## 引用文献

- 石原あや・鎌田佳奈美・檜木野裕美・橋本真美・高橋清子・由里恭子(2004) 子ども虐待に対する保育士のアセスメント及び関わりへの傾向 保育士経験年数の差異における比較, 大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要, **9**, 9-18.
- 厚生労働省 児童相談所における児童虐待相談対応 報道発表資料(2009)  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/07/dl/h0714-1a.pdf>.
- 町田江美・上原里程(2006) 小学生とその保護者の性に関する意識および行動の違い地域と学校保健との連携による実態調査結果から, 思春期学, **24**, 492-497.
- 益田早苗・浅田豊(2003). 関係機関職員の子どもの虐待に対する意識に関する一考察—青森県における調査をもとにして—, 子どもの虐待とネグレクト, **5**, 157-166.
- 佐藤幸子・遠藤恵子・塩飽仁・矢本美子(2003) 子ども虐待に対する高校生の意識と意識形成の世代伝播, 山形保健医療研究, **6**, 9-14.
- 反町吉秀・安達美佐・岩坂麻以・遠藤智子・諏澤宏恵・吉浦吏美(2004) 子どもの虐待予防における地域ケアシステムの構築に向けて 関係機関への調査より, 保健医療科学, **53**, 74-79.
- 高橋重宏・庄司順一・中谷茂一・加藤純・澁谷昌史・木村真理子・益満孝一・朽尾勲・木村定義(1995) 子どもへの不適切な関わり(マルトリートメント)のアセスメント基準とその社会的対応に関する研修(2)—新たなフレームワークの提示とビネット調査を中心に—, 日本愛育研究所紀要, **32**, 87-107.
- 高橋重宏・庄司順一・中谷茂一・山本真美・奥山真紀子・加部一彦・加藤純・才村純・北村定義(1996) 子どもへの不適切な関わり(マルトリートメント)のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(3)—子ども虐待に関する他職種間の比較を中心に—, 日本愛育研究所紀要, **33**, 127-141.
- 土屋葉, 春原由紀(2004)「虐待」に関する保育者の意識と経験, 厚生指針, **51**, 16-21.
- 和田清・近藤あゆみ・高橋伸彰・尾崎米厚・勝野真吾(2006) 青少年の健康リスク 少年の薬物使用問題 全国中学生意識・実態調査, 思春期学, **24**, 70-73.
- 八重樫牧子(2003) 母親の虐待的傾向および虐待経験との関連性からみた母親の子育て不安, 子ども家庭福祉学, **3**, 11-23.
- 八重樫牧子(2005) 大学生とその母親の児童虐待意識の関連性, 川崎医療福祉学会誌, **14**, 415-423.